

# 自閉症者の描画における色彩傾向

## 1. 研究の背景と目的

自閉症の児童<sup>1)</sup>の描画における色彩傾向に関する研究は1970年～1980年代に散見され、それらの先行研究によると、赤、青、黒の色彩使用が多いという結果が得られている。また、そのいずれかの配色で描かれている絵を見て、その子の障害を尋ねると必ず「自閉傾向です」と答える印象であり、自閉症児の色彩使用は「黒と赤」「青と赤」の配色が特徴的である(澤田1984)。しかし、それらは児童が対象であり、ある程度社会性が身についた成年<sup>2)</sup>を対象とした研究は見当たらない。自閉症であっても、成長や教育を受けることにより症状は改善される。そのため、先に述べた赤、青、黒という描画に使用する上位の色が成長や生活範囲の広がりによって変化するのはと疑問に思い、本研究では自閉症者(成年)の色彩傾向について検証することを目的とした。この検証は、自閉症者を理解する上で1つの手がかりになり得るであろう。

## 2. 研究方法

### 1) 調査対象(表1)

- A 障害者支援施設の男性入所者 3名
- B 生活介護事業所の男性利用者 3名

表1: 対象者の基本属性

性別	年齢(調査時)	療育手帳	障害支援区分
A 男	31	A	5
B 男	43	A2	5
C 男	44	A2	5
D 男	23	A	不明
E 男	21	A	4
F 男	31	A	4

### 2) 調査時期

- A 障害者支援施設(入所施設)  
プレ調査: 2014年6月  
本調査: 2014年6月～7月
- B 生活介護事業所(通所施設)  
本調査: 2014年8月

### 3) 調査方法

対象者に描画作成をしてもらい、収集する。その描画を基に色数の集計、分析を行った。調査方法の詳細は以下に示す。

#### I. 描画作成手順

①自由画: A4の無地の用紙を渡し、16色クレヨンで自由に絵を描く。自由に描くことが難し

かった場合は、好きな色を選んでもらい、線を描くよう促す。

②塗り絵: ○△□が印刷されてあるA4の用紙を渡し、16色クレヨンで自由に色を塗る。

①、②については、こちら側からは、できる限り色彩選択の指示をしない。その時の気分によって色彩選択が変わる場合もあるため、日を変えて複数回実施する。個別か集団かは状況に応じて対応する。

#### II. 描画作成時間

1人合計30分(描画時間20分+準備片づけ10分)とした。ただし、本人の描きたい気持ちが強い場合、状況に応じて延長する。

#### III. 集計方法

色の使用量に関係なく、色の種類の選択にのみ着目する。澤田(1984)が用いた表を参考に集計する。1人あたりの合計枚数を10枚に計算し直し、分析を行う。

#### 4) 倫理的配慮

今回の研究で得られた情報を研究目的以外では使用しないこと、対象者の情報は匿名性を遵守することを施設に説明し、本人及びその保護者に書面にて承諾を得た。

## 3. 結果

### 1) 全体的な色彩傾向(図1)

2施設の自由画と塗り絵の集計結果を合計したものを図1に表した。青(47.22回)、緑(44.58回)、赤(40.35回)の使用頻度が圧倒的に多く、水色(17.21回)、茶色(16.85回)、黒(14.16回)と続いていく。16色のうち、使用しない色はなかった。

### 2) 入所施設と通所施設(図2)

対象者のサービス利用形態(入所、通所)によって色彩傾向に違いが見られた。

入所施設を利用している対象者は緑、青、赤の使用頻度が圧倒的に多く、色彩傾向に偏りが見られる。また、16色中5色は使用していない。

通所施設を利用している対象者は肌色や青の使用頻度が多いが、全体的にまんべんなく色を使用しており、偏りがそこまで見られない。また、使用していない色はない。

自由画でも、上記とほとんど同じ結果が得られた。

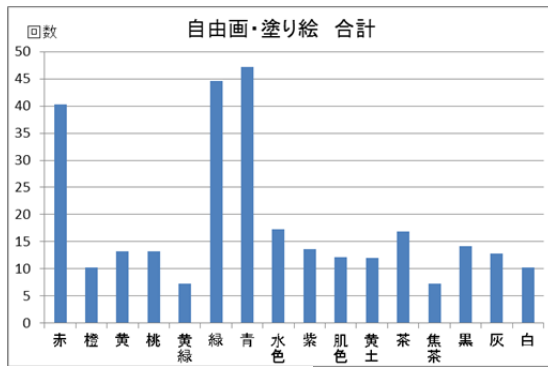


図1：自由画と塗り絵の合計

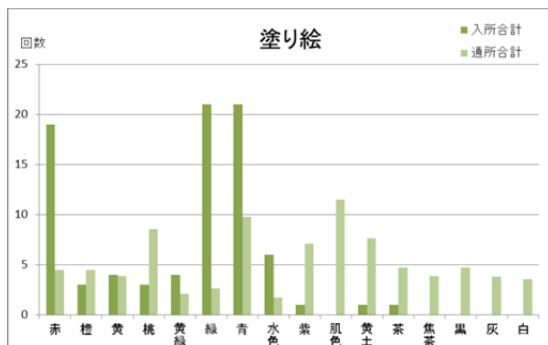


図2：入所と通所の色彩傾向の違い（塗り絵）

#### 4. 考察

##### 1) 全体的な色彩傾向

自閉症児の色彩傾向の上位にあった黒が自閉症者になると少なくなった。黒は「恐怖、抑圧」という意味があり、「闇に紛れることで危機を回避しようとする無意識の自己防衛」という解釈がある（安原 2005）。自閉症児の特徴として、自分の意思や感情を上手く表現できないことや、周囲の状況をつかめずに苦しむことがある。そのような苦しみが黒に表れ、色彩傾向の上位に挙がっているのだと考えられる。これに比べ、自閉症者の結果では、成長とともに自分の意思や感情を表現する手段を得ることや、周囲の人たちが自閉症のことを理解することで、子供の時よりも苦しみが減り、黒の使用量が減ったのだと考えられる。

一方、赤、青の使用について上位に変化は見られない。野村（1982）は「2歳健常男児では、赤、緑、青の使用率が高く、原色に集中している。3歳～5歳児は赤、黒、青の使用率が高い傾向がある。6歳男児は黒、赤および青系統の色が多い。」と述べている。このことから、自閉症者は、身体面は成熟しているものの、精神面での発達は実年齢に達していないと推測される。

#### 2) 入所施設と通所施設

施設に入所している対象者は、施設内での生活が多く、関わる人も固定される。集団生活は、行動範囲が制約されることも多く、実際に目にする色彩や刺激が少ない。そのため、色彩情報が少ないと考えられる。このことから、使用する色に偏りが見られ、使用しない色もあると考えられる。

施設に通所している対象者は基本的に自宅で生活しており、家族との関わりがある。また、通所することで、人やものと接することが施設入所者よりも多いと考えられる。そのようなことから、色彩情報を多く持っているため、使用する色が入所している対象者よりも増えたと推測される。

「色彩情報が多いほど色彩が豊かになり、色数の多さも同様だ」と森、齋藤（2012）が述べていることから、色彩情報の量と絵に表れる色数が関係していることが理解できる。

#### 5. 結論と今後の課題

自閉症者の色彩傾向として、赤、青は児童と変わらず上位であり、黒の使用は減った。また、サービス利用形態によって色彩傾向の違いが見られた。

今回の研究は先行研究との比較を行ったが、1人の人を追って調査したほうが、色彩傾向が明確になったかもしれない。また、調査施設によって対象者の年齢に偏りがあったため、色彩傾向を検証することが難しかった。さらに、色を見る仕組みや成長と色彩の関係等、色に関する知識をより多く持つことができれば、もっと研究が深められたかもしれない。

#### 注

- 1) 児童は、児童福祉法に則し、18歳に満たない者とする。
- 2) 成年は、民法に則し、20歳以上の者とする。

#### 引用・参考文献

- ・澤田武（1984）「発達障害児の描画における色彩使用の傾向」『情緒障害教育研究紀要』3, 47-50
- ・武井幸子（1971）「自閉症児の描画活動における色彩傾向」『日本保育学会大会発表論文抄録』（24）237-238
- ・森俊夫、齋藤益美（2012年）「幼児の絵の色彩特徴と形態特徴の評価」55-61 等